

研究室紹介

沖縄県衛生環境研究所 環境科学班

大気環境グループ

衛生環境研究所は、中央衛生試験所として沖縄市中央病院内(旧コザ市胡屋)に併設され、移転・改称などを経て1980年に、現在の沖縄県南城市(旧大里村)に建てられました。企画管理班、衛生科学班、環境科学班より構成され、大気環境グループは環境科学班に属します。

当グループでは、大気中のガス、粒子、降水、放射能、騒音・振動・低周波音、悪臭などをモニタリング・調査研究する業務を行っています。

大気環境調査では、県内に10局ある測定所において、オゾンや窒素酸化物、微小粒子状物質などを常時測定し大気汚染状況を監視している他、揮発性有機化合物を月に一度、県内6箇所にて採取、測定を行っています。

沖縄本島の北端である辺戸岬には、酸性雨原因物質の長距離輸送の機構解明等の目的のため、国設酸性雨測定局があります。そこで湿性沈着及び乾性沈着試料を採取し、研究所にて分析を行っています。

平成18年度より、大気中の繊維濃度バックグラウンドレベルの把握を当所敷地内で行っています。また、必要に応じて建築物解体工事等の大気中繊維濃度の測定や、一般環境及び居住環境中の悪臭物質問題への対応を行っています。

沖縄県特有の課題もいくつかあります。

沖縄本島の面積のうち18.8%を米軍基地が占め、特に中部地域では嘉手納・普天間基地を抱え、恒常的に実施される訓練、演習に伴う両基地の航空機騒音が大きな問題となっています。特に低周波音は、建物をがたつかせる「物的影響」、眠りを妨げる「睡眠影響」、圧迫感、頭痛、吐き気等がもたらされる「心理的・生理的影響」などの可能性があり、基地周辺の定期的な騒音調査から得られるデータは、問題評価の基礎データとして有益となります。

また、沖縄県には、全国で3箇所しかない米軍の原子力潜水艦が寄港する港があります。潜水艦寄港時には調査体制を組み、沖縄原子力艦放射能調査施設に泊り込みでモニタリングを行い、調査結果を公開しています。

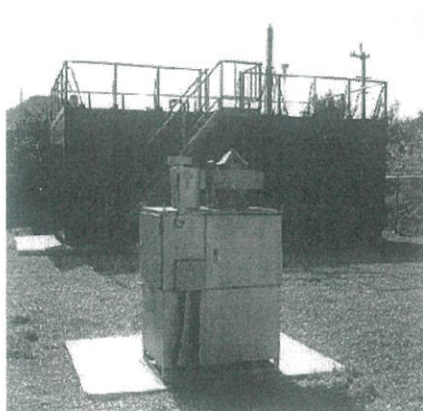
2011年3月11日に起きた東日本大震災による、福島原子力発電所の事故の影響で、これまでの業務が大きく変わりました。通常、定期的に行っている海水や土壌などの環境放射能水準調査に加え、土日、祝日も当番制で職員が出勤し、大気中の降下物や、上水中の核種分析、空間放射線量率の測定などを行ってきました。

大気環境グループの業務は多岐にわたり、現場でのメンテナンス、試料採取が大変多くあります。さらに、講習会や会議なども加えて職員が県内外へ出向くことが多く、全員が揃う機会も少ないです。

多忙な業務ではありますが、メンバー全員が仕事に対してモチベーションを高く持っています。そして、班長、リーダーを中心に、お互いに助け合いながら毎日の業務を楽しく遂行しています。

これからも積極的な姿勢で調査研究に取り組み、沖縄県民の安心・安全な暮らしを守っていきたくと考えています。

(大気環境グループ 上原勇人)



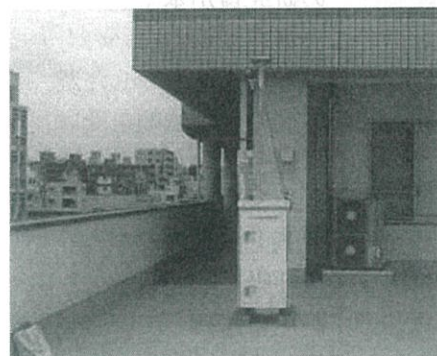
国設辺戸岬酸性雨測定局



沖縄県衛生環境研究所



有害物質測定



微小粒子状物質測定



騒音振動・低周波音測定